



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

08

2017.06

▶ 理事長あいさつ

一般社団法人 日本肩関節学会理事長 柴田陽三



日本肩関節学会員の皆様こんにちは。昨年10月に一般社団法人日本肩関節学会の理事長を拝命しました福岡大学筑紫病院の柴田です。紙面をお借りして就任のご挨拶を申し上げます。私は昭和56年に福岡大学医学部を卒業し、福岡大学医学部整形外科学教室に入局致しました。初代教授の高岸直人先生は日本肩関節学会の設立者のお一人で、本学会の事務局を長年福岡大学でお世話させて頂いたこともあり私が肩関節外科の道に進んだのも自然な流れと言えました。日本肩関節学会は世界で最も早く設立された肩関節に関する学会です。このような歴史ある本学会の理事長を拝命し、その責任の重さをひしひしと感じている次第です。

本学会の発展の経緯を会員数で見えますと記録が始まった1978年に280名からスタートし、昨年2016年の決算時には1,762名を擁する大きな学会に成長しました。このため2014年にそれまでの任意団体から、一層の社会的責任を果たすために一般社団法人へ組織を変革することになりました。定款に掲げていますように本学会の目的は肩関節医学の進歩普及に貢献することです。この目的を達成するために行っている事業について簡単にご説明致します。

学会事業

1. 学術集会

毎年開催される学術集会は基礎的、臨床的研究を発表する場として若手研究者の登竜門となっています。会員各位の研究発表をお待ち致します。

2. 学会賞の顕彰

基礎研究と臨床研究のそれぞれ優秀な1編に学会賞を授与します。

3. 短期留学生制度

現在、European Society for Surgery of the Shoulder and the Elbow(SECEC)、Korean Shoulder and Elbow Society(KSES)、American Shoulder and Elbow Surgeons(ASES)へ短期で留学生を派遣しています。前2者はお互いの学会員が行き来する交換留学生制度として、ASESへは本学会からのみの派遣を行っています。会員の皆様におかれましてはふるって応募頂き、世界のトップレベルの肩関節外科医の手術や外来を見学してください。肩関節外科医としてかけがえのない経験となるでしょう。

4. 社会保険委員会

肩関節鏡視下手術、リバー型人工肩関節などの施行にあたり、会員の皆様にアンケート調査を行い、そのデータに基づいて適正な手技料が保険収載されるに至っています。肩関節外科の普及の条件の一つに適正な手技料の設定があります。今後も医学の発展にみあった手技料の申請を行ってまいります。

5. 教育研修委員会

肩関節外科医の育成のために種々の教育研修講演を企画しています。

6. 学術委員会

症例数の少ない疾患に対し学会主導で multi-center study を行っています。

7. 広報委員会

会員の皆様に学会の活動報告を行っています。

8. 財務委員会

主要な財源は会員の皆様からの会費に依存しております。学会の事業を遂行するため是非とも会費の納入をお願い申し上げます。

そのほか、倫理・利益相反委員会、定款等運用委員会、リバーズ型人工関節運用委員会、選挙管理委員会、手術手技認定のあり方ワーキンググループ、肩の運動機能研究会のあり方ワーキンググループが活動を行っております。

以上の多くの活動を介して理事、代議員、会員の皆様と協力し肩関節外科学の発展に寄与してまいります。

なお、これらの業務を遂行し指導的立場果たす代議員の役割は大変重要です。現在、代議員不在の地域があり、こうした地域での肩関節外科医の担い手の育成は肩関節外科の発展だけでなく、肩の障害で困っている患者さんを救う事になると考えております。今年も代議員の公募を行います。一緒に頑張ってもらえる方をお待ちしておりますので是非とも応募をお願い致します。

皆様今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



日本肩関節学会理事

左から（敬称略）

畑幸彦（副理事長）、井手淳二（副理事長）、中川照彦、菅本一臣、井樋栄二、柴田陽三（理事長）、望月由、末永直樹、岩堀裕介、池上博泰

▶ 前理事長あいさつ

「若手肩関節医への期待」

前理事長 玉井和哉



日本肩関節学会会員の皆様にはますますご活躍のこととお喜び申し上げます。2016年秋に理事長を退任し、同時に日本肩関節学会の名誉会員にご推挙いただきましてから、早くも8か月が経過しました。また2017年3月には、28年余り勤務した獨協医科大学を定年退職し、名誉教授の称号をいただきました。理事長在職中、また大学在職中に皆様からいただきましたご支援、ご厚情に心から感謝を申し上げます。

法人化されてから3年になる日本肩関節学会には、なお様々な課題があります。教育研修制度、専門医制度、手術登録制度、代議員選出法、財務体質の改善、定款規則の整備、肩の運動機能研究会のあり方などです。また、医療を取り巻く状況の変化によって、肩関節学会にとっての問題点も変化しています。柴田陽三理事長を始めとする役員の皆様のご尽力によって、変化に対応しながら着実に学会としての姿が整いつつあることを感じ、安堵しているところです。

しかし何と言っても、学会にとって重要なことは学術です。本年の第44回学術集会では、会長の菅谷啓之先生が海外から多くの方を招かれるとのことですので、これまで森澤・井樋・望月会長が推進してこられた学術集会の国際化がしっかり定着すると確信しています。学術集会の国際化とは、海外からの参加者と討論することによって我々の考え方が彼らに伝わり、我々が世界の中でプレゼンスを獲得することだと思います。そのような場で活動したいという目標を持っておられる、頼もしい若手の皆様をお願いしたいことが1つあります。それは、自身の仕事を学会発表する時点で英文論文にしておいてほしい、ということです。英文論文がアクセプトされてから学術集会で発表するくらいでもよいでしょう。これは、論文として認められるような内容のある、そして練られた題材を発表しないと世界の聴衆の心を打たないということが一つ、論文にはまだ遠い状態で発表すれば、その着眼が良ければ良いでアイデアは世界に筒抜け、言葉は悪いですが盗まれてしまうことがもう一つの理由です。国際化された場合は、日本語の壁によって守られていた従来の国内学会と異なり、通常、保護されていません。攻撃の材料(良い発表ネタ)と防御のセンス(自分のプライオリティを確保する)とが必要だと思います。

さらに言いますと、研究の内容についても日本なればこそその論文を出してもらいたいと願っています。純粋な臨床研究、例えば手術技術の開発、工夫に関するものはもちろん重要です。我々は外科医ですから。それらはぜひ technical noteとして、あるいは case seriesでもよいですから英文論文にしてください。ただ手術成績の報告は、日本の医療システムの特性もあって、欧米の high volume の施設から出て来る論文と同等のインパクトを持たせるのはなかなか大変です。私は、日本の良さが最も発揮できるのは、臨床の視点から始めた基礎研究、あるいは基礎研究の成果を応用する臨床研究ではないかと思います。ご承知の通り日本では臨床家が基礎研究をやる機会があり、また臨床家の身近に基礎研究者がいる環境があります。つまり臨床と基礎の距離が近いのです(大学医局と関係を持たない人には遠いかもしれませんが)。これは世界でも稀な環境ですので、そこを生かして日本の独壇場を作りたいですね。もちろんすでにそのような研究は少なからずありますが、今後、基礎と臨床が近接した研究をいっそう推進すべきではないかと考える次第です。日本肩関節学会の定款にも「肩関節医学の進歩普及に貢献する」(下線筆者)ことが本学会の目的であると書かれています。外科だけではありません。

▶ 新理事就任あいさつ

理事 井手淳二（副理事長）

2期目の理事を務めさせていただきます井手でございます。この度、柴田理事長より副理事長を拝命し気が引き締まる思いです。本学会は公益法人化され、時代のニーズに応じる柔軟性と独創性があり、国際的にも貢献できる学会であることが求められています。また、財務的問題も加わり柴田理事長も難しい舵取りが続くものと思いますが、しっかりと支えていけるよう努力する所存ですので、どうぞよろしく願いいたします。

私は、2004年から日本肩関節学会幹事（現代議員）を務め、これまで教育研修委員会（委員長）、JSES編集委員会、JSES購読増加を検討する委員会、学会制度委員会、ICSES準備委員会、高岸直人賞決定委員会（現担当理事）、財務委員会に所属し、2014年から理事として本学会の運営に携わってきました。そして、40年史編纂委員会担当理事として日本肩関節学会40年史ウェブサイトを完成させることができました。その編纂を通してあらためて先人の業績とご苦労に敬意を表したいと思います。

私は、1984年に熊本大学整形外科教室に入局し、関連病院にて外傷学を含めた整形外科を研鑽した後、1993年1月熊本大学医学部助手となり肩関節疾患の治療に着手しました。2001年に英国王立整形外科病院肩関節外科に留学し、以後、肩関節外科に関する臨床および基礎研究に研鑽を重ね、2006年2月熊本大学大学院助教授に昇任し、2013年4月に熊本大学医学部附属病院関節再建先端治療学寄附講座教授を拝命し今日に至っております。今後とも御指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

理事 畑 幸彦（副理事長）

このたび、日本肩関節学会の理事に承認していただき、さらに副理事長に任命していただきました畑幸彦です。

このような大役を仰せつかるには、まことに微力でございますが、役員各位ならびに会員の皆様のご助言、ご協力をあおぎ、柴田陽三理事長を補佐しながら職務に邁進してゆく決意でございます。どうぞよろしくお願い致します。

これまで多くの会員の諸先輩方が行ってきた臨床や研究の成果のお陰で、ゆるぎなく着々と成長してきた当学会ですが、更なる飛躍のために国際化を積極的に推進しています。国際化には質の高い研究を世界へ発信する必要があり、私が担当している学術委員会でも prospective な多施設研究を学会主導で進めています。しかし魅力ある学会運営には国際化の他に、若手医師の教育・育成（技術指導や研究指導）が必要であり、それには先人達が築いてきた日本独自の創意と工夫を如何に伝えていくかが重要なポイントであると思います。先人達が築いてこられた研究成果の上に新たな成果を積み重ねてそれを発展させた先にこそ世界をリードするチャンスがあると信じています。

今回、3期目の理事をさせて頂くにあたって、この2年間を3期（6年間）の総決算の意味でも理事としてやり残したことが無いように頑張りたいと思います。その意味からも、今後は再び初心に帰り、日本肩関節学会の隆盛に向けて努力を重ねていきたいと考えております。会員の皆様方のあたたかいご理解ご協力を心からお願い申し上げます、就任のごあいさつと致します。



理事 池上博泰

2016年10月に開催された代議員による社員総会において、一般社団法人日本肩関節学会理事に選出いただき、ありがとうございました。大変光栄に思うと同時に、責任の重大さを痛感しております。もとより微力ではありますが、少しでも会員の皆様のお役に立てるよう全力を尽くす所存ですので、何卒よろしくお願いたします。

私は1985年に慶應義塾大学医学部を卒業し、直ちに同大学整形外科に入局いたしました。卒業3年目の平塚市民病院出向中に石黒隆先生のご指導のもと手外科に興味を持ち、慶大の外科グループに加えていただきました。1994年からはボストンのMassachusetts General Hospitalに留学させていただき、1997年からは慶應義塾大学病院で勤務してきました。大学帰室後、研究班のグループ改変が行われ上肢班というグループになり、1999年の第26回本学会（小川清久会長）から、小川清久先生のご指導のもと肩関節の勉強をさせていただくようになりました。慶應義塾大学整形外科上肢班のチーフとなり、2012年4月に慶應義塾大学から東邦大学に異動し、現在、東邦大学医学部整形外科学講座（大橋）に勤務しております。

今回、本学会理事として定款等運用委員会担当を拝命しました。本学会は2014年8月1日から一般社団法人となりましたが、定款を含めて諸規則の運用においては、まだまだいくつかの問題点があるかと思えます。日本整形外科学会をはじめ他の関連する学会の定款および諸規則の運用を参考にしながら、スムーズな運用を進めていきたいと考えています。会員の皆様におかれましては、何かお気づきの点やご要望などがありましたら、学会事務局にご連絡いただけたら幸いです。

本学会は会員数も増え、法人化によりさらに充実してますます発展するかと思えます。そのような中で、特に若い会員にとって魅力ある学会になるよう努力することが私の責務かと考えております。理事長の柴田先生を支え、明るい未来のある学会を目指して参りたいと存じますので、会員皆様の温かいご理解とご支援をお願いいたします。

理事 井樋栄二

日本肩関節学会は世界一古い歴史と伝統を誇る学会です。会員数も1,700名を超える大きな学会に成長しました。一方で、会員数が日本の半分にも満たないKSESは非常に国際的な活動を強化しており、ASESでの発表演題数、JSESへの掲載論文数において日本肩関節学会を上回っております。我々としてもこの事態を安閑と眺めているわけにはいきません。日本肩関節学会ももっと国際化を進める必要があります。今年の5月に第90回日本整形外科学会学術総会を仙台で開催させていただきました。ここにはこれまで最高の60名を越す海外招待講師と100名を越す海外からの一般参加がありました。全体として日本人講師による教育研修講演が81題に対して海外講師による招待講演が41題となり、講演の3分の1が英語で行われたこととなります。海外からの一般参加には北欧や南米からの参加者もあり、日整会がますます国際化していることの証と考えます。今年の第44回日本肩関節学会は菅谷啓之会長がアジア太平洋肩肘シンポジウムを併催し、海外から多くの講師を招いていると聞きます。このような流れで英語を聞くことにも、英語で発表することにも抵抗感がなくなるよう努力する必要があると考えます。日本肩関節学会のさらなる進化・発展を願っております。柴田陽三理事長の新体制のもとで、私は引き続きリバーズ型人工肩関節運用委員会を担当させていただくことになりました。委員長は菅谷啓之先生にお願いし、前委員長の高岸憲二先生にはオブザーバーをお願いしました。日本で反転型が使えるようになって3年目に入りますが、すでに人工肩関節の7～8割は反転型になりました。現在の登録率65%を100%に上げるべく、今後も登録制度の普及と啓発に努めてゆく所存です。皆様のご協力をよろしくお願申し上げます。



理事 岩堀裕介

この度、日本肩関節学会の新理事に就任させていただきました岩堀裕介です。本学会に入会して28年、幹事(現代議員)に就かせていただいて8年の年月が経過しました。伝統ある日本肩関節学会は、ここ3年の間に理事・代議員制度導入、一般社団法人への移行、事務局の外部委託、機関雑誌「肩関節」の電子ジャーナル化といった大きな変革を遂げました。私は昨年まで財務委員会委員長、雑誌「肩関節」編集委員会副委員長、定款等検討委員会(現定款等運用委員会)委員の任に就かせていただき、そうした変革作業の一旦を担わせていただきました。財務委員会では、当時の柴田陽三担当理事の元、より透明性の高い財務管理、経費節減の徹底、確実な収入の確保のために、各委員会の事業計画と予算案の作成、対面会議からWeb会議への移行、JSESのWeb購読料込みの年会費の値上げ、賛助会員の新規募集活動などを行いました。編集委員会では、当時の中川照彦担当理事・濱田一壽委員長の元、電子ジャーナル化のシステム構築、投稿規定の改訂などを行いました。定款等検討委員会では、当時の柴田陽三担当理事・中川泰彰委員長の元、理事・代議員制度導入、一般社団法人への移行に見合った定款や関連規則の改訂作業に協力致しました。そして、昨年より理事会も新体制となり、柴田陽三先生が新理事長に就任されました。昨今の経済情勢、医療情勢、社会情勢を踏まえ、学会が置かれた環境は更に厳しさを増すことが予想されます。その中で、健全で活気ある、そして社会的・国際的にも貢献できる学会活動を継続していくためには、舵取り役としての理事会の牽引力が必要です。私は現在、財務委員会担当理事を拝命し、林田賢治新委員長とともに学会にとって屋台骨となる財務関連業務に携わっております。理事というより責任の重い立場で本学会に貢献させていただきますので、どうか宜しくお願いします。

理事 末永直樹

この度2016年から最後の任期2年間の一般社団法人日本肩関節学会の理事を拝命された整形外科北新病院上肢人工関節・内視鏡センターの末永直樹です。2002年より日本肩関節学会幹事、2012年より最年少の理事として4年間教育研修委員会を中心に日本肩関節学会の運営に携わってきました。この間、日本肩関節学会の収支状況が厳しい中、財務状況改善とより学会員が多く参加しやすいよう教育研修会の学会中開催を各学会長にお願いし、肩関節分野の基本的事項の研修と一方で近年の外科的治療の高度化に伴う技術研修のためのキャドバーワークショップも札幌医大整形外科学講座および解剖学第二講座のご協力のもと2年間開催しました。出席者の先生方の終了後アンケートでは非常に満足度も高く、今後も同様の基礎知識や時代に即した肩関節外科技術の習得のための教育研修会を行っていきたく考えています。

昨今、各学会より、より良い医療の普及のためという目的で認定医制度または手術技術認定制度などで医療行為の縛りをかけることなどがクローズアップされています。本来、医師たるもの医師法上、医師としての医療行為は担保されており、自己責任の上、常に最新の知識や技術の習得に鍛錬し、最良の医療を提供すべく準備すべきものと考えます。本年度より教育研修委員会の委員長として名古屋市立大学整形外科学講座の後藤英之先生をお迎えしました。新たなプログラムで日本肩関節学会の目的である肩関節に関する研究の促進を図り、進歩、普及に貢献し人類の福祉に寄与する、つまり目前の一人一人の肩疾患に苦しむ症例の治療に適切な医療を提供できる教育研修の場を発展させ、また特殊な疾患、治療法だけでなく、肩が困る症例全てにより良い医療を提供できる学会員の育成のため、一般社団法人日本肩関節学会の未来の礎を築いていきたいと考えています。



理事 菅本一臣

このたび柴田理事長が新しく就任されて前期に引き続き理事を拝命いたしました大阪大学の菅本一臣です。新体制となって引き続き、国際委員会と利益相反委員会を担当いたしております。

日本肩関節学会は45年の歴史を持つ由緒ある学会ですが、それは単に古いという時間的なものだけではなく、独自性のある研究を様々に輩出してきたという輝かしい歴史があることと思います。近年特にグローバル化が叫ばれていますが、英語での討論以外に、日本独自のオリジナリティのある研究成果を如何に世に問うことができるかもグローバル化の重要な要素であると考えています。名古屋大学の特別教授益川敏英先生は海外での英語の発表なくともノーベル賞を受賞されました。それはひとえに研究の素晴らしさが評価されてのことであると思います。

日本肩関節学会においても素晴らしい研究が行われています。私は微力ですが、それらの研究がより素晴らしい研究となるように後押しができればと考えています。

その一方で、私には2度の留学経験がありますが、世界の大きさを肌で感じることができました。またそのいずれでも多くの友人を作り、多くの楽しい経験を積むこともできました。同様の素晴らしい経験をより多くの学会員に経験していただけるように、国際委員会として少しでも貢献したいと思います。

また現在私は大阪大学に勤務いたしておりますが、近年様々な臨床研究では利益相反や倫理的なものが叫ばれるようになっていきます。個人の権利保護などの観点からも幾分致し方のないことですが、一方では研究が公明最大に行われることの担保ともなっています。日本肩関節学会では社団法人化される以前からその重要性に気づき、委員会を立ち上げたことは慧眼であり、それにより研究が問題なく行われていることが保証されています。その方面でも私なりに貢献させていただくことで、学会員の研究がさらに発展していくことを願ってやみません。

理事 中川照彦

今回、2期目の理事に就任した同愛記念病院の中川照彦と申します。気がつけば10名の理事の中で最古参になってしまいました。現在63歳でこれが最後の理事活動になります。

雑誌「肩関節」編集委員会、社会保険等委員会、肩の運動機能研究会のあり方ワーキンググループの担当理事になりました。

雑誌「肩関節」編集委員会の担当理事は再任です。濱田一壽委員長のもと、今期から佐野博高先生が副委員長に就任しました。本委員会は昔から査読が厳しいという伝統があり、それを現在も守り続けています。編集委員はもちろんのこと、査読を依頼された正会員の先生方も熱心に提出された論文を読み込み、文面や図表の誤り、考察における論理の整合性に関してなど、細部にわたるまで極めて緻密に審査されます。当然、査読者間で意見が分かれることがあり、この場合は編集委員によるWeb会議で活発に議論され、編集委員がまとめを記載し、投稿者にもどします。厳格な査読制度により雑誌「肩関節」の質が維持されており、これは今後も続くものと確信しております。

社会保険等委員会の担当理事は初めての就任で、退任された米田稔先生から引き継ぎました。これまで本委員会の委員、委員長、副担当理事を歴任し、この間、米田稔先生のご指導のもと、関節鏡下肩腱板断裂手術や関節鏡下肩関節唇形成術の保険収載に尽力してきました。現在、橋口宏先生が委員長として大活躍しており、昨年要望していた関節鏡下肩腱板断裂手術と関節鏡下肩関節唇形成術の複数手術が認められ保険収載されました。さらに関節鏡下肩腱板断裂手術(複雑なもの)が増点されました。手術アンケート調査を4年に1回行ってきました。現在、望月智之先生が中心となってアンケート用紙を作成し、委員全員で議論して最終段階の調整を行っています。会員の皆様にはアンケート調査へのご協力をよろしく願いいたします。

肩の運動機能研究会のあり方ワーキンググループは昨年できたもので、担当理事になり今回も再任されました。

委員長は浜田純一郎先生で、副委員長は理学療法士の村木孝行先生です。肩の運動機能研究会には、発表論文が医学中央雑誌に業績として残らない、事務局がない、会員名簿がなく抄録を郵送できない、参加職種に規定がない、などの諸問題があり、これらを解決すべく活動しています。昨年の本研究会では参加者にアンケート調査を行いました。皆様が納得できるような方向になるように努力いたします。

理事 望月 由

この度、伝統ある日本肩関節学会の理事に選出されました望月由です。

1985年に日本肩関節学会に入会させていただき、2009年に幹事に就任、その後プロジェクト委員会と教育研修委員会の委員会活動を行わせて頂き、2014年に理事に選出させていただきました。また、昨年は第43回日本肩関節学会学術集會を主催させていただきました。この度、さらなる日本肩関節学会の進歩と発展のために理事会の運営・企画に参加させて頂き、精一杯努力したいと考えております。

日本肩関節学会の世界の肩関節外科における貢献は目覚ましいものがあります。しかし、われわれの先駆者である日本肩関節学会の先輩方が達成した多くの偉業を知らない若い世代の先生方が徐々に増えてきています。若い世代の先生方に対して先駆者たちが使命感をもって、創意と工夫を積み重ね、貴重な研究成果に至った経緯、方法論を伝え、今後の発展の礎にする必要があると考えます。そして、日本肩関節学会の歴史を振り返り、現状を正確に把握し、アジアをはじめとした世界に目を向け、さらに世界に向けて情報を発信できるように精一杯努力していく所存です。そのためには、まず理事会と委員会ならびに代議員会とが双方向に連携することが肝要であり、広報委員会を担当させていただくことにより、真に会員のためになる事業を行っていきたいと考えています。

広報委員会は、日本肩関節学会が理事長制度となってできた委員会なので比較的新しい委員会です。委員会の主な活動は、日本肩関節学会を広く人に知らせることと、日本肩関節学会員に情報を発信していくことの二つです。このために、日本肩関節学会ホームページを充実するとともに、英語版ホームページも充実させることが大切と考えております。また、会員へのニュースレター作製も重要な活動と考えております。

今後も、日本肩関節学会の広報活動に積極的に取り組んでいく所存ですので、宜しくご指導の程お願い申し上げます。

▶ 新監事就任あいさつ

監事 衛藤正雄

今年度より監事に就任いたしました衛藤です。

旧幹事として1999年から2006年までの7年間編集委員会で雑誌「肩関節」の編集に携わってきました。その後、2006年から2007年の2年間は学会制度委員会に所属し、また2006年から2011年までJOA score 再検討委員会に所属してShoulder 36の作成に携わりました。JOA score 再検討委員会の解散後は2012年から新しく立ち上がったQOL評価表委員会の委員長として、主にShoulder 36の多疾患における再現性や有用性について各委員と日本肩関節学会で発表を行いました。一連のShoulder 36の評価が終了したという事で、QOL評価表委員会は2016年に解散をしております。その後、監事に推薦をいただき、今回就任に至りました。監事を辞書で引くと「法人の内部にあって、理事の事務の執行を監督する機関で、その職務は(1)法人の財産状況を監査する事、(2)理事の業務執行の状況を監査する事、(3)財産状況または業務の執行に付き不整の廉のあることを発見した時には総会に報告する事、など」となってい

ます。2014年の一般社団法人化により、定款の変更など様々な問題が生じており、また新専門医制度の導入など、まだまだ多くの課題が残されています。上記の職務を十分に果たし、よりよい日本肩関節学会になるように努力致しますので、よろしくお願いいたします。

監事 丸山 公

1983年10月1日に日本肩関節学会に入会以来、1987年～2013年役員幹事、その後の本学会の一般社団法人化後の代議員を経て、昨年理事会・社員総会で監事を拝命しました。故佐野精司教授（日本肩関節学会第23回学術集会会長）のもと、20年間日本大学整形外科学教室在局後、現在の医療法人社団遼山会関町病院（東京都練馬区）に移り、現在理事長と院長を兼任しております。また、地元練馬区医師会整形外科医会会長、東京都城北整形外科医会会長等を務めており、本学会の数名の先生方にもご講演頂いており、御礼申し上げます。本学会JOAスコア再検討委員会委員長を務めていた2001年～2013年の間には、患者立脚肩関節評価法をはじめとする多くの評価法をリリースすることが出来ました。これも会員の皆様の多大なるご協力の賜物と、改めて感謝申し上げます。監事職経験は、学会ではありませんが、民事再生後の中間法人で3年間程の経験があります。一緒に監事を務めて下さる衛藤正雄先生、森澤佳三先生とは旧知の仲ではありますが、一般社団法人法上では監事はひとりひとり独立した立場でありますので、一緒に協議はするものの、自ら責任感を持って法人の会計監査、理事等の職務遂行監査等にあたらせて頂く所存です。財政困難な昨今の本学会ではありますが、理事や代議員の皆さんの英知を結集してその危機を乗り越え、本学会の益々の発展に微力ながら貢献したいと思っておりますので、何かご意見ご要望等ありましたらご遠慮なくご一報下されれば幸いです。宜しくお願い致します。

監事 森澤佳三

この度日本肩関節学会の監事に就任させていただきました。世界で一番歴史のあるこの日本肩関節学会の監事に就任できた誇りと同時に責任を痛感しています。法人化に伴い規約の改定や各種委員会の充実、学会が主体として行う事業等の増加で学会の運営経費が増加しています。また、JSESの購読に伴い円安の状況が支出金額の増加に繋がっています。このような状況では学会運営経費の節約、配分調整が重要となるため財務管理の役割が大きくなっていきます。そのため会計監査の重要性が更に増してきています。今後日本肩関節学会が更なる発展を成し遂げるには必要な事業と不必要な事業をしっかりと区分していくことおよび運営経費の節約と支出の減額を図ることが必要です。このような観点から理事会、社員総会に対して監事として客観的な意見や助言を行い、日本肩関節学会の学会員のために円滑かつ健全な学会運営が出来るように職務を果たしていきたいと思っています。微力ですが精一杯務めさせていただきます。



写真左から
衛藤正雄、森澤佳三、丸山公

▶ 新代議員就任あいさつ

代議員 今井晋二

私は平成元年に滋賀医科大学を卒業後、平成6年に大学院を卒業しました。大学院時代は第二代福田眞輔教授の下、脊椎外科を志しました。平成8年からヘルシンキ大学に留学し、「関節炎の痛み」と「人工関節の耐用性」を研究しました。平成10年に帰国し、日本学術振興会特別研究員（PD）に就任し、平成12年から同研究員としてアムステルダム自由大学に留学、「骨形成の分子メカニズム」について研究しました。平成13年に帰学した頃、医局から手外科医が不在となり第三代松末吉隆教授の下、手・マイクロ外科を担当しました。平成16年滋賀医大リハビリテーション部助教授・診療科科长に就任し、国立大初のリハビリテーション病棟の開設準備に従事する一方で、松末教授が関節軟骨のご専門でしたので、大学院生と「軟骨再生」について研究しました。平成15年、それまで5名いたスポーツ・肩班全員が大学から不在となり、肩を担当するようになりました。平成24年に整形外科准教授、27年に第4代滋賀医科大学整形外科教授に就任しました。回りにくい経歴だと、思われるかもしれませんが現在の最大関心事は「肩関節挙上困難」であり、その診断は私にとりまして脊椎・腕神経叢・関節鏡・人工関節・リハビリテーションの全ての知識を駆使しても余る事のない深い「淵」であり、治療はその全ての技術をしなくても到達困難な遥かなる「道」だと考えています。その深さと遥かさに惹かれ、精進を心に誓っています。

代議員 国分 毅

この度、日本肩関節学会代議員に選出されました新須磨病院整形外科の国分毅です。私は神戸大学を平成8年に卒業した後、神戸大学整形外科教室に入局いたしました。その後、大学院での基礎研究、留学を経て、平成15年に神戸大学に戻り肩関節疾患に対する研究と臨床を遂行して参りました。

当時は反復性肩関節脱臼に対するBankart修復はほぼ鏡視下に行われるようになっていましたが、腱板断裂に対する手術の多くはまだ直視下に行われておりました。そこで、鏡視下手術を極めるべく諸先輩方の手術を見学させていただき、カダバーセミナーにも参加して関節鏡の技術を高めて参りました。近年では、鏡視下手術だけでなく人工関節置換術も積極的に行っております。また、神戸大学在籍中は、腱板修復補強材としての生体吸収性材料の開発研究や、培養腱板細胞を用いて腱板修復過程を促進させる基礎研究も行い、肩関節疾患の治療成績向上を目指して参りました。

このような成果が挙げられたのも、多くの肩関節外科医と知り合い交流できたことの賜物と思っております。まだまだ若輩者ではございますが、これまでに私が受けてきました恩恵を皆さまにフィードバックし、少しでも日本の肩関節外科の発展へ貢献できるように尽力する所存でございます。今後とも、何卒よろしく願いいたします。

代議員 小林 勉

この度日本肩関節学会の代議員に就任致しました小林勉と申します。

代議員立候補にあたり、群馬大学名誉教授、サンピエール病院名誉院長であられる高岸憲二先生と同愛記念病院整形外科部長であられる中川照彦先生にご推薦賜りました。大変ご高名な先生にご推薦いただけましたこと、大変光栄でありますとともに感謝しております。本当に有難うございました。

平成4年群馬大学医学部を卒業し、当初手外科専門医を目指して10年程経った頃、当時在籍していた群



馬大学整形外科で高岸憲二先生から肩関節外科をご指導いただいたことが私と肩関節外科との出会いです。その後数年間群馬大学で学会事務局を担当させていただく時期があり、その際には事務局代表として約3年間貴重な経験をさせていただきました。

現在は群馬県内の医療福祉系の私立大学である高崎健康福祉大学大学院理学療法学科に勤務し、理学療法士育成に関わるとともに同大学附属クリニック院長として整形外科診療を行っております。

このように事務局としての経験と理学療法士の指導者としての立場を活かして伝統ある日本肩関節学会ならびに学会員の諸先生方のお役に立てればと考えております。何卒宜しく願い申し上げます。

代議員 塩崎浩之

この度、新たに日本肩関節学会の代議員に選出いただきました塩崎浩之と申します。私は1986年に新潟大学を卒業し、新潟大学の関連病院で修行してきました。学生時代はラグビー部に所属していましたが反復性脱臼となり、1988年には飲んで寝ると脱臼するようになってしまいBankart手術を受けております。1990年にはじめて肩関節研究会(現、日本肩関節学会)に参加しましたが、きわめて個性的な肩の重鎮の先生方がなかば喧嘩腰に熱く意見を戦わせており、少し気後れしたことを覚えております。1992年に福田宏明先生のもとで半年間、肩関節外科の基本を学ばせていただき、肩関節外科医として歩み始めました。

新潟では当時、身近に相談できる先生もおらず、文献を読んでは手探りで手術や治療にあたっていました。その後は、肩関節学会を通じて徐々にいろんな先生方と知り合うことができ、直接・間接的にいろいろと教えをいただいております。現代は、その場にいながら世界の一流どころの先生の手術動画や講演も簡単に見れるという本当にいい時代です。しかし、やはり直接的な交流に優るものはありません。

日本肩関節学会が、討論と交流の場として会員の先生方に有益でありますように、そして肩の学問と診療が一層レベルアップして患者さんに笑顔が届けられますように、代議員として微力を尽くしたいと思います。どうぞよろしく願い申し上げます。

代議員 仲川喜之

私は1983年3月奈良県立医科大学を卒業し同大学整形外科教室入局後、尾崎二郎先生に師事し1984年に肩関節研究会(現、日本肩関節学会)に入会させていただきました。この間、肩関節の臨床、特に肩関節周囲外傷に興味を持ち、受傷メカニズム、骨折形態の解析、新たな治療法の開発に取り組んでまいりました。また石灰沈着性腱板炎、変形性関節症(一次性、二次性)の研究にも携わってまいりました。1988年7月からは現在勤務しています宇陀市立病院(前、榛原町立榛原総合病院)にて、約28年間の長期にわたり地域医療に貢献し、特に奈良県の東部、南部の肩関節外科を一手に引き受け、第一線の整形外科医、肩関節専門医として従事しています。肩関節に関する論文は193編(筆頭著者97編、肩関節学会誌54編、英文10編)、肩関節に関する学会・研究会発表は161演題(筆頭演者61題、肩関節学会での発表70演題)にのぼります。現在、日本整形外科学会代議員、日本骨折治療学会評議員、中部整形外科災害外科学会評議員、奈良肩関節フォーラム代表世話人を務めさせていただいております。2013年4月からは宇陀市立病院院長に就任し2014年4月奈良肩肘センターを開設し、奈良県ならびに三重県西部伊賀地域の肩関節疾患の治療向上に努めております。今後はさらに精進を重ね「日本肩関節学会」の発展に微力ながら寄与させていただければと願っています。

代議員 水野直子

この度代議員に選出して頂きました、市立豊中病院の水野直子と申します。この場をお借りして、ご推薦ならびにご支援くださった先生方に心より御礼申し上げます。私は1998年に山形大学を卒業し、2002年より大阪厚生年金病院の米田稔先生のもとで、肩の診断、治療（特に肩関節鏡視下手術）について一から勉強させて頂きました。また2010年から1年半の間、フランスリヨンのGilles Walch先生のもとで、リバーズ型人工肩関節や Latarjet 法などのオープン手術について勉強させて頂きました。これらの貴重な経験を活かし、歴史ある本学会に代議員として少しでも貢献できるよう、頑張りたいと思います。また女性初の代議員ということで、男性とは違った視点でアイデアを出していければと考えております。若輩者ではございますが、何卒よろしく御礼申し上げます。

▶ 第43回日本肩関節学会を終えて

第43回日本肩関節学会学術集会会長 望月 由（県立広島病院整形外科 主任部長）



2016年10月21日(金)22日(土)の2日間、リーガロイヤルホテル広島において、第43回日本肩関節学会学術集会および第13回肩の運動機能研究会(会長 菊川和彦)を開催させていただきました。お陰様で1,500名を超える参加者をお迎えし、無事終了することができました。開催に際しましては、会員の先生方をはじめメディカルスタッフの皆様のご支援を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

広島では、故安達長夫先生が第8回肩関節研究会を1981年に主催されて以来35年ぶりの開催となりました。安達長夫先生は肩関節外科の恩師であり、さらに小生が学術集会会長に選出されるためにご尽力頂いた恩人でもあります。残念ながら、今回の学術集会の最終日に逝去されました。安達長夫先生が我々を見守っていて下さったおかげで、今回の学術集会を無事終えることができたと思っております。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

本学会のテーマは、「覧故考進 - Regeneration -」としました。「覧故考進」とは、先輩の業績を引き継いで、将来の局面を切り開くという意味です。世界の肩関節外科における日本肩関節学会の貢献、特に日本肩関節学会の先輩方が達成した多くの偉業を知らない若い世代の先生方が増えています。先駆者達が、使命感をもち創意工夫を積み重ね、貴重な研究成果に至った経緯や方法論を若い世代の先生方に伝えることは、今後の発展の礎になると考えました。この学会のテーマにそった「覧故考進セミナー」を6組の先生方にお願ひさせて頂き、すべてのセミナーが大変好評でした。また、その様子を地元のテレビ局が取材にこられ、広島地区で1週間放送され、好評を



全員懇親会

マツダ zoom zoom 球場から駆けつけてくれたホーカーの皆様と1,000人以上の参加者でCCダンスを踊りました。



博しました。そして、国際化の流れを今回も引き続き進めるため、英語セッションを継承しました。さらに国際化を加速するように、昨年4月に広島で開催されたG7広島外相会合に続き、5月にオバマ大統領が、現職の米国大統領として初めて広島を訪問しました。この歴史的な出来事を機に、国内外を問わず多くの方々を国際都市広島にお迎えし、戦後71年を経過し被爆から復興再生した広島の現状を世界に伝えることは大変意義深いことでした。一方、医学の分野

でも再生 - Regeneration - は最新のトピックです。広島大学学長の越智光夫先生が開発された培養軟骨細胞移植に代表される組織再生は今後の医学および医療の永遠の命題であり、日本肩関節学会として今後取り組むべき課題と考え、「Regeneration」というテーマを掲げました。復興再生した広島から、第43回日本肩関節学会学術集会を通して、「No more war」の平和のメッセージが世界へ発信されたことは、医学の世界のみならず、全世界へ貢献できたのではないかと考えました。

最後に本学会を開催するにあたり、歴代の学会長、特に第41回の森澤佳三会長と第42回の井樋栄二会長から細かい点にまで多くのご助言をいただきました。また、理事長をはじめ理事の先生方、代議員の先生方からも運営について多くのご助言をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。



▶ 第44回日本肩関節学会会長あいさつ

第44回日本肩関節学会学術集会会長 菅谷啓之（船橋整形外科病院 スポーツ医学・関節センター長）



現在、10月6日（金）より8日（日）まで品川にて開催される第44回日本肩関節学会／The 1st Asia-Pacific Shoulder Elbow Symposium・第14回肩の運動機能研究会・第1回肩の看護研究会の準備を鋭意進めております。先日5月15日をもって演題登録を締め切りましたが、計867題の演題応募がありました。内訳は、第44回日本肩関節学会／The 1st Asia-Pacific Shoulder Elbow Symposiumが578題（国内483題、海外95題）、第14回肩の運動機能研究会が216題、第1回肩の看護研究会が73題と、いずれも過去最高の演題応募となりました。皆様にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。国際学会と銘

打っている関係か、海外からの演題応募は想定していたアジア・パシフィック地区だけでなく、北米やヨーロッパ、中東やオセアニアからも一般演題応募があり、国際的な注目度の高さが伺われます。現在、これらの抄録の詳細な査読を行っておりますが、なるべく多くの演題を採用させて頂き、多くの方々に是非参加して頂きたいと考えております。今回は、この一般演題部門の他に、1,400名収容可能な第一会場はすべて同時通訳付きの英語セッションとなります。既に40名を超える海外招待講師の参加が決定しておりますが、10月6日は腱板をテーマに、10月7日は関節症と外傷を午前中、午後は不安定症をテーマに、また8日はスポーツ肩肘障害をテーマに国内外の著名あるいは新進気鋭の講師によるシンポジウム形式で魅力的なプログラムを作成しましたので、国内だけでなく海外からの多くの参加者を期待しております。代議員をはじめ多くの日本の先生方にも、国際セッションでの演者や座長を近々お願いすることになると思いますが、その節はどうぞご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

第14回肩の運動機能研究会でも過去にない多くの応募演題が集まりました。運動機能研究会の会場も第1会場と同規模の1,400名収容の会場を用意しております。特筆すべきは、医師と理学療法士のコンバインドセッションで、連日のテーマに合わせて保存療法や後療法についてディスカッションします。初日は腱板、2日目は人工関節と不安定症、3日目は投球障害についてですが、特に3日目は海外の医師とセラピストを含めて第1会場ですべて同時通訳付きのコンバインドセッションを行う予定です。是非とも期待して頂きたいと思っております。一方、本年の試みとして看護の部を独立させ第1回肩の看護研究会としましたが、予想を上回る73題という多くの演題応募がありました。看護師は理学療法士とはまた別のプロとして職種ですから、看護の演題を運動機能研究会の中で扱うのには限界があるのかもしれませんが、今回の試みが今後の学会の在り方の参考になれば幸いです。我々運営スタッフ一同、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

第44回日本肩関節学会
The 44th Annual Meeting, Japan Shoulder Society
Combined with **The 1st Asia-Pacific Shoulder & Elbow Symposium**
"Pros & Cons: Seeking the Best Patient Care"
2017年10月6日(金)～8日(日)
[会 長] **菅谷 啓之**
船橋整形外科病院
スポーツ医学・関節センター長
グランドプリンスホテル新高輪
国際館パミール

第14回肩の運動機能研究会
[会 長] **高村 隆** 船橋整形外科病院
スポーツ医学・関節センター 特任理学療法部長

第1回肩の看護研究会
[会 長] **小形 松子** 船橋整形外科病院看護部長

〒274-0002 千葉県船橋市東船橋1-4-23
TEL: 0476-425500
FAX: 0476-425501
E-mail: 44jss@jssjp.com
<http://www.44jss.com>

▶ 委員会報告

雑誌「肩関節」編集委員会

委員長 濱田一壽

雑誌『肩関節』への投稿などいつもご協力ありがとうございます。

今回、編集委員会では数名の入れ替えがありました。岩堀裕介先生（副委員長）、原正文先生、丸山公先生が去り、新編集委員として佐野博高先生、塩崎浩之先生、仲川喜之先生、山門浩太郎先生が加入しました。新編集委員会は、担当理事 中川照彦、委員長 濱田一壽、副委員長 佐野博高、内山善康という体制で、合計28名の委員で運営していきます。

さて、編集委員会では例年2月から3月のWeb会議で、担当編集委員が評価に困ったもの、3名の査読者の判定が著しく異なるもの、担当編集委員の評価がmajor revisionまたはrejectの論文を審査しています。これら以外の論文は担当編集委員が個別に行っています。

第43回日本肩関節学会(2016年)の発表演題462編のうち雑誌『肩関節』第41巻に投稿された演題は合計153編で、昨年の投稿数196編から減少しています。本年度は2編がreject判定で、修正依頼150編のうち、141編は再提出され、論文取り下げが6編、5月12日の時点で未投稿が3編です。投稿、再投稿の締め切り日は厳守して下さい。締め切り日を過ぎた投稿原稿は受け付けません。以下に、間違えやすい項目、投稿者から送られたご質問に対する回答から選んで記載します。

原著論文としての投稿は学位論文を原則としますが、日本肩関節学会での発表論文で著者がしっかり書きたいと意思表示した場合、他学会で発表した演題であっても投稿可能です。その旨記載していただくと、受け入れ可能かどうかを編集委員会で審議いたします。原著論文は他の論文に比べてより高い質が要求されます。日本肩関節学会で発表した演題は、学術集会発表論文としての投稿をお願いします。雑誌『肩関節』では学術集会発表論文、原著・総説、症例報告は業績としては同等に扱われますが、proceedingは日本肩関節学会において発表した演題の発表記録であり、業績にはなりません。ただし、『肩関節』ではproceedingも引用可能としていることから、他の形式の論文と同様3回の査読を行い、論理的な文章への変更をお願いします。

論文募集年度よりも以前の年度の日本肩関節学会で発表した演題の投稿時には、論文本文の末尾に“(本論文の要旨は第〇〇回日本肩関節学会で発表した。)”の一文を入れてください。

学会発表論文・proceedingの症例報告の著者数は主著者を含めて5名まで、症例報告以外の投稿論文(学会発表論文、原著・総説、proceeding)の著者数は制限していませんが、常識的な範囲内をお願いします。

正常例の研究、保険適応が認められていない薬剤、機材などを使用した研究は必ず施設の倫理委員会を通してください。やむを得ない理由で1年以上の経過観察をしていない論文については、すべて編集委員会で掲載の可否を審議しています。他誌のproceedingも雑誌『肩関節』のproceedingと同様に引用できますが、引用文献の末尾に(proceeding)と記載して下さい。抄録は引用できません。

第1稿では必ず文字制限を守ってください。

論文投稿時には、利益相反自己申告書を含めすべての必要書類をそろえて提出して下さい。

投稿規定、必要書類は適宜改訂されているのでぜひホームページに載っている最新のものを確認して執筆をお願いします。

ご質問がありましたら、カバーレターに記載いただくか事務局にメールでご連絡ください。ご連絡いただいた内容を編集委員会で検討いたします。

皆様のご理解ご協力をよろしく願いいたします。



国際委員会

委員長 菅谷啓之

国際委員会は、昨年秋の理事改選以降一部メンバーが変更され、菅本一臣先生を担当理事とし、委員長菅谷啓之、委員として今井晋二先生、佐野博高先生、船越忠直先生、三幡輝久先生、望月智之先生の7名がメンバーとなります。2017年は3月にKSESトラベリングフェローとして、名古屋大学整形外科の酒井忠博先生（現、トヨタ病院整形外科）、AR-EX 尾山台整形外科の平田正純先生の2名が、約4週間の韓国での研修と歓待を受けてまいりました。本年は、10月6日から8日までの第44回日本肩関節学会の直前2週間にSECECトラベリングフェロー2名が来日されます。受け入れ担当施設の先生方は宜しく願い申し上げます。また、来年1月には2018年秋に派遣するASESトラベリングフェロー2名、SECECトラベリングフェロー1名の募集を、更に5月には2019年春に派遣するKSESトラベリングフェロー2名の募集を開始いたしますので、皆様奮ってご応募のほどお願い申し上げます。

また、国際委員会では、個人的な長期海外留学の門戸を常に開いて斡旋のお手伝いをいたしますので、海外留学に興味のある学会員は遠慮なく国際委員会メンバーにお声掛けください。今後とも国際委員会メンバー一同、日本肩関節学会員の国際化に向けて鋭意努力していきますので皆様宜しく願い申し上げます。

高岸直人賞決定委員会

委員長 伊崎輝昌

第30回高岸直人賞は、第43回日本肩関節学会学術集会で発表された投稿論文の中から下記の論文に決定しました。受賞者は、第44回日本肩関節学会学術集会において表彰されます。

●基礎論文

京都府立医科大学大学院 運動器機能再生外科学 仲川 春彦 先生

『肩腱板修復後の腱骨接合部における骨髄由来細胞の分化形態』

●臨床論文

慶應義塾大学 整形外科 松村 昇 先生

『三次元磁気共鳴画像法を用いた腱板構成筋の定量的解析』

社会保険等委員会

委員長 橋口 宏

日本肩関節学会からの要望により平成28年度診療報酬改正では「関節鏡下肩関節唇形成手術（肩腱板断裂手術を伴うもの）」が収載され、保険点数も「腱板断裂を伴わないもの」32,160点、「腱板断裂を伴うもの」45,200点となりました。同一術野複数手術の保険収載は十分に評価されていない現状を考えれば、大きな成果が得られたものと考えます。

本委員会では平成30年度診療報酬改正に向けて、肩石灰性腱炎に対する手術保険点数の改正要望に取り組んでおります。肩石灰性腱炎に対しては、「肩甲関節周囲沈着石灰摘出術」（K060-2）が収載され、保険点数は3,600点となっています。これは、多くが鏡視下手術として行われている現状と大きく乖離しております。このため、術式名を「沈着石灰摘出術（肩関節）」および「沈着石灰摘出術（肩関節）（鏡視下）」に改め、各保険点数を41,918点、61,753点とし、厚生労働省に要望書を提出しました。厚生労働省ヒアリン



グでは、実態調査に基づいた必要性・妥当性について説明・要望を行ってまいります。

平成28年度診療報酬改正で要望を行った「人工骨頭・人工関節置換術（肩関節）（腱移行術を伴う）」が「別途評価を行う根拠が十分に示されていない」との指摘を受けて収載が見送られたように、保険収載を要望する上で実態調査は不可欠なものとなっております。本学会の手術アンケートは綿密な集計作業・解析を行う有用な実態調査手法であります。次回の手術アンケートは、本2017年（平成29年）の1年間の手術件数について2018年（平成30年）に調査票の送付・回収を行い、集計・解析した結果を2019年（平成31年）に雑誌「肩関節」に掲載する予定であります。今回の調査では、リバー型人工関節など新設項目もありますが、不要項目の削除も併せて行い、より簡便に調査票記入が行えるよう鋭意準備を行っております。次回アンケート調査へのご協力をお願い致します。

教育研修委員会

委員長 後藤英之

今年度より教育研修委員会の委員長を拝命致しました。不慣れではありますが、会員の皆様に貢献できるよう努めて参りますのでどうかよろしくお願い致します。

今年度の教育研修委員会の活動としては、まず第9回教育研修会を第44回日本肩関節学会開催期間中の2017年10月7日と8日の朝（7:00-8:00）に行なう予定です。

講演の内容および講師の先生は、以下のようになります。

[教育研修講演1]

座長：北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター長 末永直樹先生

演題1：Overuseによるスポーツ障害の診断と治療 review

演者：新須磨病院 整形外科 国分毅先生

演題2：肩関節周囲炎（凍結肩、石灰沈着性腱板炎）の診断と治療 review

演者：高崎健康福祉大学 理学療法学科 小林勉先生

[教育研修講演2]

座長：北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター長 末永直樹先生

演題1：肩関節周囲の骨軟部腫瘍 review

演者：名古屋市立大学大学院医学研究科 整形外科 後藤英之先生

演題2：肩関節の変性、炎症性疾患（OA, RA）の診断と治療 review

演者：KKR北陸病院整形外科 小林尚史先生

今年度をもって3年間かけて開催した教育研修会の12の講義分野（解剖・診察、肩関節不安定症、腱板断裂、人工肩関節、画像診断、骨折、小児の肩疾患、神経障害）を完了することになります。学会発表や一般の講演会では、あまりテーマにならない内容も含まれますが、どれも肩関節外科学を研鑽するためには必要不可欠な内容であると思います。会員の皆様の多くの参加をお待ち致します。

また、昨年まで2回にわたってCadaver workshopを開催させて頂き、好評を得ましたが、今年度は行ないません。今後も同様に開催していくのか、また内容を変えていくか、会員の皆様からのご意見、ご要望を頂きながら、検討していきたいと思っております。

学会として会員の皆様に up to date な学術情報を提供し、明日からの肩関節疾患の診療のお役に立てるよう今後も研修会を企画して参ります。皆様からのご指導、ご意見を頂きますようお願い致します。



学術委員会

委員長 森澤 豊

学術委員会では佐野博高先生が編集委員として転出され、新たに小林勉先生が加入されました。

活動内容は、凍結肩の調査結果について浜田純一郎委員が中心となり作成した論文 Is Contracture of the Shoulder Joint Classified as Stiff Shoulder or Frozen Shoulder? -Survey of Frozen Shoulder Questionnaire Responses from the Japan Shoulder Society- の英文雑誌への投稿準備ができました。

肩鎖関節脱臼の調査を引き続いて行っておりますが、なお学会のなかでも X線撮影をはじめとする診断や、治療方法において意見のわかれることが多い状況です。そこで高瀬勝己委員が作成した案をもとに、肩鎖関節脱臼の検査方法、分類、治療方法について学会員の先生方に対して、アンケートを作成しています。現場で治療している先生方を対象とし、これらの実際について調査するよう考えています。

初回脱臼に対する肩関節外旋位固定の前向き調査については、山本宣幸委員を中心に、順次協力病院を募り開始する方向です。

会員の皆様には、今後も問い合わせや御協力を依頼することが多くなるかと思いますが、何卒宜しくお願ひ申し上げます。

広報委員会

委員長 北村歳男

広報委員会の活動は日本肩関節学会の活動や情報を会員および一般の方々にお知らせすることにあります。広報委員会は日本肩関節学会に理事会制度が設けられた際に作られた新しい委員会です。今回を含み8号のニュースレターが発行されました。内容には各委員会での決定事項で重要な連絡事項を含むことがあります。例えば編集委員会での雑誌「肩関節」の投稿に関する変更事項などは会員の皆様に直接的に関わる問題です。したがって、発行にあたっては前もって全会員の皆様にメールで連絡し、そして日本肩関節学会のホームページ内の右列に「日本肩関節学会 Newsletter」として掲載しています。確認をしていただきますと幸いです。

広報委員会には今年度2人の委員が新しく加わりました。担当理事は望月由先生、委員長は北村歳男、委員に新井隆三先生、石田康行先生、国分毅先生、小林勉先生、中川泰彰先生、夏恒治先生、松村昇先生、(五十音順)の合計9名により活動しています。主な活動はニュースレターの作成および発行です。今年度よりその発行時期を変更することになりました。年に2回(2月、8月)発行されていた会員へのニュースレターは、今回発行の8号を6月に夏号として、来年1月に冬号として9号を発刊することになりました。ニュースレター作成においては多くの代議員に執筆を依頼しております。その執筆への負担軽減を図る必要があります。また、読者へも分かり易くするため、読みやすい字数を検討しています。合わせてアンケートなどを通じ読者からの要望があれば取り入れる努力したいと考えております。今後も日本肩関節学会の広報活動に積極的に取り組んで参りますので、皆様からお気付きの点があれば、いつでも学会事務局に連絡いただければ幸いです。

財務委員会

委員長 林田賢治

平成 29 年度から日本肩関節学会財務委員会の委員長を拝命することになりました大阪警察病院整形外科の林田賢治です。財務委員会は今年度から前委員長の岩堀裕介先生が担当理事となり、石毛徳之、内山善康、鈴木一秀、中川滋人、村成幸の各委員、外部アドバイザーとして税理士の吉井宏文先生で構成されています。

岩堀理事から引き継いだ昨年度までの資料では、現在の学会の財務状況はかなり悪く、多くの問題を抱えています。一番の問題点は、収入が少ないことです。賛助会員、企業からの寄付が 100 万円に届かない状態です。これに関してはより多くの企業から、広く、厚く賛助を得られるように今後とも委員で協力して進めていきたいと思っています。また、企業と良好な関係にある代議員の先生方のご助言が賛助会員募集に大いに効力を発揮するので、是非ご協力をお願いしたく存じます。収入を増加させる他の方法として、広告等が挙げられます。学会の中立性、公平性を担保しつつ企業にメリットのある方法を検討してゆきたいと思えます。

年会費の問題もあります。現在の年会費は 15,000 円ですが、これには JSES の購読料が含まれています。年間購読料契約料を差し引くとかなり低額の年会費になっています。財務状況によっては年会費の値上げを検討する必要が出てくるかと思えます。

それ以外に、各委員会の開催や Web 会議の更なる活用など、支出の見直しもさらに検討する必要があります。

財務委員会の役割として、収支を改善させることは必要ですが、有意義な事業には積極的に予算をつけることも大事だと思っています。そのためにも、良好な運営状態にするべく努力をしてゆきたいと思えます。会員の先生がたには色々ご迷惑をおかけすると思えますが、現状をご理解いただき、今後ともご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

倫理・利益相反委員会

委員長 橋口 宏

ご存知の先生方も多いと思いますが、臨床研究法案が平成 29 年 4 月 7 日に可決・成立し、臨床研究法として平成 29 年 4 月 14 日に公布されました。公布から 1 年以内に施行される予定です。

本法案の概要としては、

【1】法律の対象となる研究

治験を除く医薬品の臨床研究のうち、「特定臨床研究」である、①製薬企業から資金提供を受けた医薬品の臨床研究、②未承認・適応外薬の医薬品の臨床研究が対象となります。

【2】臨床研究実施基準

厚労省令で定める「臨床研究実施基準」に従って研究を行う必要があります。実施基準には、①臨床研究の実施体制に関する事項、②臨床研究を行う施設の構造設備に関する事項、③臨床研究の実施状況の確認に関する事項、④対象者に健康被害が生じた場合の保障・医療の提供に関する事項、⑤特定臨床研究に使う医薬品を製造販売するメーカーの関与に関する事項、⑥その他必要な事項が定められており、詳細については今後公表される予定です。

【3】研究計画の届出義務化

特定臨床研究を実施する研究者は「実施計画」を作成し、厚労省への届け出と厚労省認定の「認定臨床研究審査委員会」の審査を受けることも義務付けられます。臨床研究実施基準は GCP（医薬品の臨床

試験の実施の基準に関する省令) に準じたものになると予測されており、利益相反に関しては【2】⑤の事項が該当します。倫理審査委員会認定制度構築事業は、厚労省が平成26年度より開始した事業です。平成27年度より日本医療研究開発機構へ移管され、平成26～28年度には33機関の委員会が認定されました。

新たな法案が施行されるように、臨床研究に対する厳正な倫理審査は社会への説明責任を負う研究者の義務となっています。肩関節学会主導で行う多施設研究に対しても本委員会での倫理審査を行うことが決まりました。学会員の先生方も新たな研究を始める際には倫理審査を念頭に置いた取り組みを行うようお願い申し上げます。

定款等運用委員会

委員長 中川泰彰

2017年からの定款等運用委員会は、担当理事池上博泰先生、委員長は中川泰彰、委員が伊崎輝昌先生、西中直也先生、林田賢治先生、松村昇先生、森澤豊先生の各先生方で構成されています。一般社団法人化して2年が経過し、昨年10月の当委員会では、ほぼ審議する議題もなく、休会する予定だったのですが、役員メンバーが変わると、文面上の色々な問題点が指摘されるようになり、少なくとも、あと2年間は色々審議事項が出てきそうです。2017年は、2月と5月に委員会が開催されました。以下にその内容を説明いたします。

まず、委員会規則に齟齬がありました。第4条第3項に、「委員は、正会員とし、役員がそれを兼任することができない。」とあるが、学会賞に関する規則の第4条第1項に、「委員は代議員のなかから選出し、それに前学術集会会長を加えて6名以上とし」とあります。前学術集会会長は理事であることが多く、先ほどの委員会規則と整合性を果たしていないとの指摘がありました。この件に関し、例外をもうけるかどうかまづ議論し、例外をもうけて良いとの結論に達し、そこで、委員会規則の第4条第3項の文章を、「委員は、正会員とし、原則として、役員がそれを兼任することができない。」と変更することになりました。これは、理事会の承認を経て、10月の社員総会で議決すべき事項です。

次に、会員規則に「正会員1名の推薦が必要」「再入会時は、それまで未納となっていた年会費をすべて支払うことを条件につけること」の2項目を新たに盛り込むことが理事会で決まり、その文面を作成いたしました。

最後に、役員選出規則の不明瞭な点が指摘されました。現在の規則では、理事は役員選出規則第2条第3項で「前項の被選挙権は、選挙年の4月1日現在、満63歳未満の年齢の正会員に限りこれを有するものとする」、また、代議員は代議員選出規則の第7条第2項で「(2) 定時社員総会の時に満65歳に達した者」と、それぞれ年齢制限がついています。ただし、監事は、一応理事と同じ解釈を昨年までしてきたが、この点について、理事会で再度議論することになりました。これらは、最終的に、社員総会で決定される予定です。

定款を含め、色々な規則に問題点が生じてくることが予想されます。疑問点や、問題点に気づかれた方は定款等運用委員会までご連絡頂けると幸いです。よろしく願いいたします。



リバーズ型人工肩関節運用委員会

委員長 菅谷啓之

リバーズ型人工肩関節運用委員会は、昨年秋の理事改選以降メンバーが変更され、井樋栄二先生を担当理事とし、委員長菅谷啓之、委員として中川泰彰先生、橋口宏先生、水野直子先生、山門浩太郎先生、米田稔先生の7名がメンバーとなりましたが、リバーズ型人工肩関節導入当初からガイドライン作成などで中心的役割を果たされお骨折り頂いた、高岸憲二先生には、引き続きアドバイザーとして委員会をサポートして頂くことになりました。懸案のJAR (Japan Arthroplasty Registry) 登録率向上を課題として活動しております、日本人工関節学会のJAR登録制度委員会メンバーの当委員会の代表として、新たに中川泰彰先生をお願いすることになりましたが、以前からの主要メンバーである高岸アドバイザーには、この方面でのサポートを中心にお願いすることになっております。現在リバーズ型人工肩関節の登録率は60～70%となっておりますが、全例登録を目指しておりますので、学会員の先生方におかれましては是非とも登録のほどよろしく願い申し上げます。登録方法が不明な方は、下記をご参照下さい(*)。また、2017年2月16日の日本整形外科学会理事会で、リバーズ型人工肩関節ガイドライン改訂版が承認され発効されました。これでガイドラインも更に実用的なものになったと考えております。日整会ホームページより確認できますので、皆様再度ご確認の上有用に活用して頂くようお願い申し上げます。また、まだまだ不備や至らぬ点もあるかと思っておりますので、問題点や不明な点がございましたら、事務局あるいは委員会メンバーに直接でも構いませんので、ご指摘あるいはお問い合わせください。

※ JAR (Japan Arthroplasty Registry) 人工肩関節登録方法

1. 日本人工関節学会のホームページにアクセス
2. JAR登録フォームをダウンロード
3. JAR登録フォーム記入
4. 日本人工関節登録制度事務局 (京都大学医学部 整形外科学教室) に Fax または郵送

注：手術をされた病院が日本人工関節学会 JAR に登録されていない場合は、日本人工関節学会のホームページからまず JAR 施設登録を行い、施設 ID を取得して下さい。

選挙管理委員会

委員長 伊崎輝昌

2017年度は、代議員選挙、第47回学術集會会長選挙を行います。候補者等の情報は、随時、会員サイトに掲示します。

[代議員選挙について]

代議員選出規則に基づき、下記の要領で選挙を行います。

選挙日程：2017年8月17日から8月30日まで候補者氏名等を掲示し、正会員による異議申し立て受付 (代議員選出規則第6条2)

2017年10月5日社員総会で信任、選任 (代議員選出規則第6条3)

[第47回学術集會会長選挙について]

定款第39条に定める学術集會会長について、学術集會会長選挙規則に基づき、下記の要領で選挙を実施します。

選挙日程：2017年10月5日社員総会で当選人決定



▶ トラベリングフェロー派遣・受入状況

日本肩関節学会では、近年、以下の先生方の Traveling Fellow を行いました。

国際委員会からの報告にもありましたように、引き続き KSES、SECEC、ASES への派遣を積極的に行っております。案内は一斉メールやHPのお知らせ欄でご連絡いたしますので、ご興味があります先生は、ぜひ応募していただければと思います。

JSS/KSES Traveling Fellows

受入：2016年10月20日～2016年11月9日		
2016	Eugene Kim	Dept. of Orthopaedic Surgery, Sungkyunkwan University School of Medicine
	Sang-Jin Shin	Dept. of Orthopaedic Surgery, Ewha Womans University Mokdong Hospital
派遣：2017年3月19日～2017年4月15日		
2017	酒井忠博	名古屋大学医学部 整形外科
	平田正純	AR-Ex 尾山台整形外科 東京関節鏡センター

JSS/SECEC Traveling Fellow

派遣：2016年9月24日～10月21日		
2016	糸魚川善昭	順天堂浦安病院 整形外科

JSS/ASES Traveling Fellows

派遣：2016年9月19日～2016年10月15日		
2016	大木聡	慶應義塾大学 整形外科
	山門浩太郎	福井総合病院 整形外科

▶ 事務局からのお知らせ

今年も早いものでもう半年が過ぎてしまいました。

事務局は5月の日本整形外科学会期間中に行われる日本肩関節学会の各委員会、理事会開催のため、現地に赴きました。委員会等の開催時以外は、医療知識は「0」ですが、会場内のセッションを聴講したり、企業展示会場に足を運んだり勉強をさせていただきました。

先生方の熱心な聴講姿や、会場内を歩き回られる姿を尊敬の眼差しでみておりました。

今年は機会があったら、整形分野の学会に出向き、他の学会の雰囲気も味わいたいと思っています。

さて日本肩関節学会の会期は、8月1日～翌年7月31日までで、現在は2016年度会期（2016年8月1日～2017年7月31日）となっております。

学会の年会費は、日本肩関節学会学術集会の事務局受付で直接納付、または12月に請求書をお送りしております。

そして5月、6月に未納の先生方には再請求書をお送りしております。

該当年の年会費（例：今期2016年度）のお振込みがございませんと、次年度（例：2017年度）のおおよそ9月から10月に更新される雑誌「肩関節」オンラインジャーナルのPWをお伝えすることができません。

またJSES（Journal of Shoulder and Elbow Surgery）のオンライン購読については、エルゼビア社のデータ更新の都合上、すでにご案内をしておりますが、6月末までに納付いただいた先生方をリストアップして、7月頭にaccount number（購読権）の付与の更新、新規追加、削除をエルゼビア社に依頼しております。

事務局業務を行っているうえで、感じていることは、JSESのaccount numberが付与されている先生で実際に閲覧できている先生がどれくらいいらっしゃるのかということです。

エルゼビア社から直接メールで更新時にaccount numberのお知らせが届きますが、メーラーやプロバイダーの設定で迷惑メールと判断されてしまう事例もご連絡をいただきます。

ご自身の状況がどうなっているのかは、事務局でも確認できますので、一度お問い合わせくださいますようお願い申し上げます。

また先生方の情報についても、勤務先やご自宅、メールアドレス等の変更があった場合は、ぜひ事務局までお知らせくださいますようお願い申し上げます。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

編集

広報委員会

後記

松村 昇

ニュースレターも今回で第8号となり、個人的には第2号に続き2回目の編集担当を務めさせていただきました。

ただし、ご執筆いただいた原稿は魅力的なものばかりで、いつも楽しみながら編集させていただいております。このニュースレターが1人でも多くの学会員の目に触れることを期待しております。

今号は柴田理事長・玉井前理事長・新理事・新監事・新代議員からのあいさつ、望月前学術集會会長の総括、菅谷現学術集會会長のあいさつ、各委員会報告を掲載させていただきました。今回から夏号のニュースレター発行が6月に変更になったこと、また理事会が新体制に移行したこともあり、今号は合計23ページに及ぶ長編となりました。

執筆依頼が春の学会シーズンと重なってしまい、ご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。大変お忙しい中、原稿をご執筆いただいた先生方、また今号の編集にあたりお力添えをいただいた広報委員会の先生方にこの場を借りて深謝いたします。

引き続き、広報委員会では皆様に読んでいただける魅力的なニュースレターを配信できるよう努力していきたいと考えています。ニュースレターで取り上げて欲しい項目など、ご意見がありましたら、ぜひ広報委員会までご一報ください。どうぞよろしく願いいたします。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

編集：一般社団法人 日本肩関節学会 広報委員会

望月由（担当理事）、北村歳男（委員長）、新井隆三、石田康行、国分毅、小林勉、中川泰彰、夏恒治、松村昇

発行：一般社団法人 日本肩関節学会

〒108-0073 東京都港区三田 3-13-12 三田 MT ビル 8 階 株式会社アイ・エス・エス内

TEL 03-6369-9981 / FAX 03-6369-9982

E-mail office@shoulder-s.jp URL <http://www.j-shoulder-s.jp/>